

会誌発刊を祝して

日本精神衛生連盟委員長 内 村 祐 之
(前 会 長)

精神衛生連絡協議会が発足して以来、おもむろに活動を開始していたが、その事業の一として、このたび会誌を発行するに至った由聞いて、喜びにたえない。立ちおけているわが国の精神衛生運動を促進する有力な器として、大きな役割をはたして貰いたいものである。それについては、この会の成り立ちがどのようなものであったかを説明しておくことが必要であると思う。

事柄は1960年(昭和35年)にさかのぼる。この年を精神衛生年とし、世界各国が力を合わせて、精神衛生普及のための運動を展開しようとすることを世界精神衛生連盟が定めたのである。そこでわが国もその一員として、わが国の実情に即した事業を行なったが、その一つに、各都道府県に精神衛生団体を作って、各々の地域における思想普及と実践活動を盛り上げようとするのがあった。各府県または地方の中には、すでに古くから有力な団体をもって活動していたものもあるが、多数の府県にはこれがないために、わが国全体として見ると、地域的アンバランスが目立っていたのがその当時の実状であったからである。

厚生省当局の適切な助言も加わって、この精神衛生年を機会にして、一兩年の遅速はあったにしても大多数の府県に精神衛生協会または協議会が結成されることになった。しかしわが国の精神衛生運動全般に通じることでもあるが、新しく結成された団体の将来性に対しては、相当な困難を予期しなければならなかった。切角生まれた新生児が丈夫に育つためには、適切な方法が講じられねばならないように思えた。このような危険を救い、さらにこれを足場にして全国的機運を盛り上げる道はいろいろあろうが、差し当り緊急と思われる方法は、各府県の団体が横の連絡を密にし、相互に助け合うことであろう。

たまたま昭和36年の秋、大阪府精神衛生協会の尽力で、この年の精神衛生全国大会を大阪市で開いたおりに、私は前述した横の連絡の必要性を説いたのであるが、翌37年の全国大会が、神奈川県精神衛生協会の世話で横浜市で開かれた機会に、各府県団体の責任者の懇親会が持たれ、横の連絡についての下相談が行なわれたのである。そして翌38年秋に、九州精神衛生協会の肝入りで、福岡市で精神衛生全国大会が開かれた際に、とにも角にも、全国精神衛生

連絡協議会の名称の下に、発足することになり、初年度の会長を私が引きうけた次第である。

この間、少なからざる人々から、質問や意見が出された。そのもつとも中心となったものは、新しい団体の性格と目的は何かということ、就中新団体と既成の団体との関係如何ということであったと思う。新団体の結成は屋上屋を重ねるものであって、むしろ既成の団体の事業の中に織り込むことは出来ないのかといった議論もあった。

しかし私見としてその際一番重要視したことは、自主的に横の連絡協議会を作ることは、更に機運をたかめて、新生団体の順調な発展に繋がるものであろうということであった。既成の団体の組織の中に入るといことは、如何にも受働的消極的な心がまえであって進展性に乏しいし、また既成団体の中で、急速に新しい諸団体を受け入れられる態勢にあるものが見当たらないという事情もあった。とに角わが国の実状としては、組織の合理化などは二次の問題であって、実践活動に重点を置くべきであると私は考えた。そして地域的新生団体が数多く出来た現在、これらが横の連絡をとり、互いに情報を交換したり、資料を提供し合ったり、相互に助け合うことは、緊急を要する問題であると私には思えたのである。互いに多くの共通点を持った各地方の精神衛生団体が協力できないで、どうして円滑な人間関係の樹立に基本を見ようとする精神衛生活動をすすめることができようか。

いろいろの意見はあったが、とに角全国精神衛生連絡協議会が発足したのである。そしてそれ以来3年、例えばその総会のおりに発表される各府県の団体の現状報告を聞いていると、私にはとても有意義であるし、定めし各府県の関係者の方々にも参考になることが多かったのではあるまいか。また今年からは日本精神衛生連盟にも加入したので、全国大会の機会などを通じて、他の精神衛生団体との連絡や親睦を深めることも有意義なことであろう。

私はこの連絡協議会が、日本国民の福祉という究極の目的を常に適確に見すえて、わが国の精神衛生運動にとって、大きな牽引車的役割をはたすまでに発展することを祈らずにはいられないのである。切に関係者各位の熱意に期待したい。